

『パシェリエンアセトの哀歌』 をめぐる問題について

——エジプト第22王朝のオソルコン2世王墓の一碑文——

藤 井 信 之

は じ め に

タニスに所在するオソルコン2世王墓（タニス1号墓）の入り口に、今日『パシェリエンアセトの哀歌』と呼ばれる一碑文がある（図1）。この碑文は、その内容からパシェリエンアセトが主君オソルコン2世に捧げたものと考えられるのだが、碑文末尾に王母カプスが王オソルコン2世のためにこの碑文もしくは墓自体を作った、と解釈されうる「謎めいた」⁽¹⁾一節があることから、この碑文の理解を混乱させている。しかもこの碑文がリビア王朝史に関する概説や研究に取り上げられるのは、殆どの場合、この末尾の一節に関係してのことなのである。そこで本稿では、リビア王朝史研究をめぐる一考察としてこの碑文を取り上げ、末尾の一節を再考しながら、この碑文の性格を明らかにし、リビア王朝史研究におけるこの碑文の史料的意義を整理検討してみたいと思う。

1 『パシェリエンアセトの哀歌』の試訳

碑文の凡その内容を知るために、まず全文の試訳を示しておくことにしたい。この碑文に関しては、今日までに、Loret (1942) ; Kees (1944), 178-

図1 『パシエリエンアセトの哀歌』
出典：Vernus (1987), 109.

180; Montet (1947), 71-73; Vernus (1987), 109; Jansen-Winkeln (1988), 36-37 らの研究⁽²⁾があるのだが、各所に難解な部分があり、碑文の細部における諸家の見解は必ずしも一致していない。本稿における課題は、エジプト語の解釈をめぐる立ち入った議論にあるのではなく、碑文の史的意義を整理検討することにあるため、エジプト語の解釈における異説については、できるだけ訳註に示しておくのでそれらの諸研究を参照していただきたい。

『パシエリエンアセトの哀歌』

ホルの子、上下エジプトのイスウト部隊の大將軍パシエリエンアセト。

あなたの面影を慕って飽くことなく^(a)、あなたのためにいつまでも^(b)悲嘆に暮れ^(c)、あなたの素晴らしさを思い起こしては、悲しみで^(d)心ははちきれんばかりでいます。

私は、物での報いより主君の僕として、あなたを偉大にさせたい(?)^(e)。

主君は、お望み通りに^(f)、彼の町、聖なる州のワセト^(g)へ行かれ、そのバーは、そのあるべきところ、百万年の館^(h)へ昇り、神なる王は、そのところに安んじられ、そのバーは、天と一つになられたのです⁽ⁱ⁾。

両国の主オソルコン 2 世、彼のためにカプスが作った (?)

[下線部が問題の末尾]。

[訳註]

- (a) n(n) wrd̄. この時期の、いわゆる後期中エジプト語では、否定辞 n と nn の用法の区別が古典期ほど明確ではない cf. Jansen-Winkeln (1996), 199 ff. and 364 ff. ここでは、n で不定詞が否定されているとした。
- (b) nn sn hwd. この表現に関しては問題がある。七つの用例を調査した Jansen-Winkeln (1985), 42-43, (25) は、1 例を保留し、数や時間などが無限であることを意味すると考えた。更にこの保留された 1 例「カルナク神官年代記断片 7」4 行目の例についても、その後 Jansen-Winkeln (1996), 199, 366 で同様とした。しかし、問題の年代記の 1 例について Kruchten (1989), 68 は、nn sn(t) (hr-)hw とし、「——を除いて同等のものなく」の意味にとれるとした。クルヒテン説を採用すれば、nn sn(t) (hr-)hw(.i) となり、「私を除いて同等のものなく」即ち「誰よりも」という訳になるだろう。
- (c) nhw(.i) n.k を未然 sdm.f とすれば、「あなたのために悲しまん！」となろう cf. Vernus (1987), 109; Jansen-Winkeln (1996), 301.
- (d) m hmm については、文脈から Kees (1944), 179; Jansen-Winkeln (1988), 37 に従った。
- (e) この一文は諸家の見解が全く分かれており、その意味するところは判然としなない。ここでは、di.i swr tw m hm nb r fk3w m ht とした。限定符を欠いている hm nb が「主君の僕」なのか「あらゆる僕」なのかで見解が分かれる。また Montet (1947), 72 and n.e を除き、諸家は di.i swr.tw とし、tw を不定代名詞とするのであるが、碑文前半部では王が 2 人称の代名詞で表現されており、この一文は未然形でパシェリエンアセトの気持ちを強く表している箇所とも考えられ、やはり王は省略されず 2 人称で言及されていてよいのではないかと判断して、tw の解釈に関しては、あえてモンテ説を採って 2 人称単数男性の従属代名詞とした。また、他の諸家と全く異なる見解を示しているのが Jansen-Winkeln (1988), 36-37; Id. (1996), 296 である。彼は、これを過去の叙述とし、swr は墓の拡張を意味しているとする。この様に諸家の見解はいろいろであり、ここでの訳も暫定的なものに過ぎない。

- (f) (r) mrr ib.f としたが, mrr(t) ib.f 「彼の御心が愛する」と関係形にとること
もできる cf. Kees (1944), 179; Vernus (1987), 109. また mrr ib.f を体言
sdm.f とし、後続する 'r b3.f と組み合わせて条件文と見ることもできそうだが
[Loret (1942), 100, 103; Montet (1947), 72], 碑文後半の文脈から判断して
そのようには考えなかった [訳註 (i) 参照]。
- (g) 諸家に従って(3), このワセトを「北のテーベ」であるタニスのことと考えるが,
Kees (1944), 179; Id. (1964), 103-104 は、これを文字通りテーベ (今日のルク
ソール) と考え、この一節をプトやブシリス、アビドスといった聖地への実際には
行われない葬送巡礼(4) と関連づけて理解した。この見解に関する他の諸家の判断は
定かでないが、極めて興味深く、その可能性を留保しておきたい。この説を採る
のであれば、4 行目文頭の swd3 を未然 sdm.f とし、「ワセトへ行かれますよう
に」とした方がよいのだが、訳註 (i) の理由でここでは差し当たりそうとらなかつ
た。
- (h) オソルコン 2 世の葬祭殿を指すと考えられる。ただ、シェションク 1 世の百万年
の館は、テーベとメンフィスにあったと考えられ、また百万年の館は王像が建てら
れた建築ともされ、タニスの王墓に付属したであろう葬祭殿に関する言及であるか
どうかは確言できない cf. Vernus (1975), 15-16, h, j; Kees (1964), 104. なお
オソルコン 2 世の百万年の館に関する言及は, Louvre E. 25. 414 にもある cf. Bar-
guet (1961).
- (i) 後半 3 行の理解も諸家により異なっている。ここでは, swd3 nb r niwt.f W3st
sp3t ntr(t) (r) mrr ib.f, 'r b3.f r st wnn(ti).f hwt nt ḥḥ n nrpt, p3 nswt
ntr(y) ḥtp(.w) hr st.f, b3.f hnm(.w) (m) hrt. と考えた。注目すべきは、後半
部では王に対して 3 人称の代名詞が用いられているということである。筆者はこの
ことから、前半部はパシエリエンアセトの王に対する気持ちが述べられているのに
対し、後半部はパシエリエンアセトの王に対する気持ちの表明ではなく、王自身の
昇天を叙述したものと考えた。Montet (1947), 72; Vernus (1987), 109 は、4
行目文頭の動詞 swd3 に対しても前半部同様 1 人称主語が省略されていると考える
のだが、上記の理由でこの考えを採らなかった。また動詞に関しては, swd3 や 'r
を未然 sdm.f とする向きが強い cf. Loret (1942), 100, 103; Montet (1947), 72;
Vernus (1987), 109; Jansen-Winkel (1994), 133; Id. (1996), 300. 訳註 (g)
で述べたこともあって、この考えを否定できないのだが、ここでは別の考えに基づ
いて訳出した。5 行目から 6 行目にかけての最後の二文は、ともに状態形を用いた
副詞文である。従って、「(そのところに) 安んじられた」のも「(天と) 一つにな
られた」のも、先立つ何らかの行為の帰結であったと考えることもできるのではな
いだろうか。その行為とは、やはり「(あるべきところへ) 昇る ['r]」ではないだ
ろうか。ここでは, swd3 と 'r という行為に対して ḥtp(.w) と hnm(.w) が対応

していると考えた。この様に考えれば、後半部は王の昇天を叙述したものとする
ことができるように思う。swd3 に付された限定符は、「行く」ではなく「繁栄する」
に付されるものであるが、これは恐らくここでの swd3 [(ワセトへ) 行く] が、埋
葬にまつわる表現であるからではないだろうか。解釈自体は少々異なるが、Loret
(1942), 101-102; Montet (1947), 72, n.e も、埋葬にまつわるものと考えてい
る。

この様に碑文は極めて難解であるが、二千五百年以上もの歳月を越えて、パ
シェリエンアセトの悲しみのほどが伝わってくる様で、感慨深いものがある。
しかし何故、最後に王母の名が現れるのであろうか。次に研究史をたどりなが
らこの点を考えてみよう。

2 碑文末尾の一節をめぐる問題

問題の碑文末尾は、nb t3wy (W3s3irkn-mr(y) 'Imn) ir n.f K3pws とな
っている。カプスがオソルコン 2 世の母であったことは、「パセンホル・ステ
ラ」の系図 [Malinine, *et al.* (1968), 30-31, pl. 10] から知られる。従っ
て、問題は ir n.f の解釈ということになる。

Jansen-Winkel (1988), 37 を除く他の諸家は、この一節を献呈の定型句
と考え、ir n.f を「彼のために作った」と解釈し、「両国の主オソルコン 2
世、彼のためにカプスが作った (もの)」とする⁽⁵⁾。つまりこの説によれば、
碑文は「カプスの献呈句があるパシェリエンアセトの哀歌」という奇妙な結論
になるのである。この場合、何故パシェリエンアセトの哀歌にカプスの献呈句
があるのか説明を要するであろう。

当初 Loret (1942), 104-105 は、n のサインが前半部と後半部で異なっ
ている (図 1, ~~~と——) こともあって、何か政治的な理由によって、この哀
歌が両者によって共作されたのであろうと推測したのだが、碑文に現れる図像
表現がパシェリエンアセト一人であることと合致せず、立ち所にして自説を取
り下げることになった [ibid., 105-106]。結局、その後も納得のいく説明が

なされないまま、この解釈から、この碑文を作らせたのはカプスであり、王墓自体ですらカプスが造ったのかもしれない、というようなことが述べられることになった⁽⁶⁾。そのため、リビア王朝時代にみられる社会の諸変化を取り上げた、極めて示唆に富む重要な論文を著したリーヒも、リビア王朝時代の葬送慣習の変化を論じる件でこの碑文に触れ、オソルコン2世は寿陵を造らなかったかもしれないとの推測を示すことになった [Leahy (1985), 61]。

また、末尾の一節の通説的解釈を採った場合、王母カプスはオソルコン2世より長命だったかもしれないということになる。もしそうであるなら、近年有力視されているアストンのリビア朝中期の短編年説が、オソルコン2世の長命を根拠の一つとしていることから⁽⁷⁾、この碑文はその有力な反証になりかねず、この時期のクロノロジーを考える上でも重要な史料となる。

これに対し Jansen-Winkeln (1988), 37 は、幾分躊躇を示しながら、この末尾の一節はサインが誤記されているとし、*.f* を *n* に修正し、「両国の主オソルコン2世 *ir.nn* カプス」と読み、「カプスが生みし両国の主オソルコン2世」と解釈した。この解釈が正しければ、上記のようなことを考察する史料とはならないし、碑文に言及される王が誰であるのかを述べているだけということになって、ロレらが突き当たった問題も氷解するのである。しかし、この解釈はなんと言ってもエジプト語を修正して読まなければならない点が最大の弱点となっており、この点が克服されない限り仮説の域をでることはないであろう。そこで、ヤンゼン・ヴィンケルン説を検証するために、母系出自の示され方を次に考察してみたい。

3 系図史料に現れる A ms n.f B

リビア王朝期によく見られる母系出自の示し方に、受動分詞、ないし関係形を用いた、A ms B; A ir B; A ms.n B; A ir.n(n) B⁽⁸⁾ 「B が生みし A」というものがある。ヤンゼン・ヴィンケルン説は、これらの最後の形を用いて碑文末尾の一節が書かれているとみるわけである。

しかし、リビア王朝期の系図史料を調べてみると、極めて希ではあるが、外見上 A ms n.f B という形になる表現が存在することが判る。精査すれば他にも例があるであろうが、今ここに筆者が検討の俎上にあげるのは、オソルコン 2 世の治世に前後する時期からの碑文 3 例である。

① Stela Cairo JE 31882, ll.23-24, [Legrain (1897), 15].

[hm ntr n 'Imn R' nswt ntrw '3 n k'h H'-n-W3st m3' hrw p3y.f šri i.ms n.f s3t n(t) s3 nswt T3-dnit-n-B3stt].

p3y.f šri は「彼の子」の意味で、ここではカーエンワセトが、碑文に前述されるアメン大司祭ユエロトの子であることを述べている。また s3t n(t) s3 nswt は、文字通りに解釈してよいのであれば、「王子の娘」という意味になり、タデニトエンバステトが王の孫娘にあたることを示している。従って、カーエンワセトとタデニトエンバステトの血縁関係⁽⁹⁾は、i.ms n.f で示されているということになる。これは、新エジプト語で i.ms の形になっているだけであり、基本的に A ms n.f B と同様ということになる。n.f の解釈は後に触れることにして、ここでは差し当たり<彼に>とだけして、「神々の王アメン・ラーの司祭、地区の長、カーエンワセト声正しき者、王子の娘タデニトエンバステトが<彼に>生みし彼（ユエロト）の子」と訳出しておこう。

② Stela Pushkin Museum I.1.a 5648 (4133), ll.2-3 (原文ヒエラティック), [Hodjash and Berlev (1982), 164, no.107].

[Pr '3 Šš3^(sic)kn mrtw 'Imn R' nswt ntrw mstw n.f m ht.f Mwt wr(t) nbt 'Išrw].

王名を構成する「愛されし者」という表現は、受動分詞を用いていると考えられることから、この碑文では mrtw と綴られているが、その位置から「一されし（もの）」と訳出する語で受動分詞と考えておいてよいだろう。同じことは後出する mstw についてもいえる。

さて、ここではその mstw n.f m ht.f に注目しなければならない。m ht.f

は、「彼の腹からの（つまり実子）」を意味する決まり文句である。系図上父系に関する言及はないが、ここでの「彼」はアメン神を指すのであろう。そして上述のように、*mstw* は受動分詞と考えられる。従って、この碑文にも *A ms n.f B* がみられるということになる。訳出すると、「彼（アメン神）の実子、アシエルの女主人たる偉大なるムートが<彼に>生みし、ファラオ、シェシオンク（3世）、神々の王アメン・ラーに愛されし者」となる。

- ③ 「プリンス・オソルコンの年代記」, B, 右パネル, ll.4-8, [Epigraphic Survey (1954), pl.20].

[hm ntr tpy n 'Imn R' nswt ntrw [imy-r m]š' wr h3wty W3s3irk[n m]3' hrw s3 nswt n nb t3wy (Tkr [t] -s3-3st-mr(y) 'Imn) 'nh dt ms n.f rt-p't wr(t) hnwt n(t) š[m3w mh̄w] hmt nswt wrt (K3r['m]'-mr(yt) Mwt) m3'(t) hrw].

この例では *A* と *ms* の間に父系が言及されているが、母系出自を示す際には明瞭に「*ms n.f B*」が用いられている。「神々の王、アメン・ラーの大司祭、大[将]軍、司令官、オソルコ[ン]声正しき者、両国の主、タケロ[ト]・イシスの子・アメンに愛されし者（2世）、永遠に生きられよ！の王子、偉大なる貴婦人、上[下エジプト]の女主人、偉大なる王妃、カロ[マ]・ムートに愛されし者、声正しき者、が<彼に>生みし（者）」、という意味になる。

以上の例は、*A ms n.f B* という形であるが、この表現があるのであれば、動詞 *ms* に代えて *ir* を用いた *A ir n.f B* という表現も理論上存在しうということになる。それでは、ここに現れる接尾代名詞 *.f* は何を指しているのだろうか。これは大変難しい問題であるが、一つの解釈は、この接尾代名詞は父を指すものとするのであろう。しかしながらもう一つの解釈として、これはエジプト語において受動分詞や関係形が用いられた場合によく見られる、いわゆる再呼代名詞 (*resumptive pronoun*)⁽¹⁰⁾ と考えることもできるように思

われる。この場合は、生まれた子供自身を指すということになる。いずれにせよ、問題の碑文末尾の一節には父系に関する言及がないのだが、これらと同じ表現を用いようとしたのだと考えれば、ヤンゼン・ヴィンケルン説の様に修正する必要はないということになるのである。また、nのサインが前半部と後半部で異なっているのは、この碑文が起草され墓に彫りつけられるまで複数の人間が関与したはずであり、そうした製作過程で生じたものと推察できるのではないだろうか。そして王名の後置については、5行目における「(あるべき)ところ」の「ところ」を表す「百万年の館」が後置されているのに対応して、「王 [p3 nswt]」を表す問題の一節が最後に置かれた、と解釈しておきたい。従って、「神なる王、カプスが生みし両国の主オソルコン2世は、そのところに安んじられ、」と訳せるだろう。

今日に至る研究の成果からは、オソルコン2世王墓にカプスが関与したことを示す他の如何なる証左も得られていない⁽¹¹⁾。碑文自体に添えられている図像もパシェリエンアセトのそれだけである(図1)。また王墓第3側室東壁の碑文は、オソルコン2世が生前この王墓に手を入れ始めていたことを示唆している [Jansen-Winkel (1987); Kitchen (1996), xxii]。そして上記のように考えれば、碑文末尾の一節は修正することなく母系出自を示すものとすることも可能なのである。以上を総合すれば、我々はヤンゼン・ヴィンケルン説を支持して、問題の末尾の一節を「カプスが生みし両国の主オソルコン2世」と解釈してよいであろう。最後に、本稿における課題である碑文の史的意義を整理検討しておこう。

結びに代えて——碑文の史的意義について

本稿では、碑文末尾の一節について、その翻字自体は修正の必要がなく従来通りの説が支持でき、その解釈についてはヤンゼン・ヴィンケルンが示した仮説を支持することが出来ると考えた。この末尾の一節は、従来信じられていたような献呈句ではなく、碑文に言及される「主君」や「王」が誰であるのかを

示しているに過ぎないであろう。このことから、碑文末尾の一節の従来の解釈から引き出されてきた、王母カプスのオソルコン2世王墓への関与は全く証明されないということになる。従って、王母カプスがオソルコン2世のために墓を準備したとか、この哀歌を捧げたなどという歴史記述は訂正されるべきであろう。また、葬送慣習についていえば、この碑文は、オソルコン2世が寿陵として自らの奥津城を準備しなかった、というようなことを証明するものではないといえる。従って、この碑文の内容に拠って、リビア朝諸王の埋葬に対する無関心を説明することはできない⁽¹²⁾。そしてクロノロジーに関していえば、この碑文は、カプスがオソルコン2世より長命であったことの証左とはならないし、それ故オソルコン2世の在位を短く見積もれる証左ともならないのである。アストン編年 [Aston (1989)] の反証となることはないであろう⁽¹³⁾。

それでは、この碑文はリビア王朝史に対してどのような情報を我々に与えてくれるのであろうか。この碑文について整理して述べれば、それは王家が関与しない、一私人パシェリエンアセトの全く私的な碑文ということになり、それが王墓内部に残されていたということになる。このような碑文が王墓内部に位置することはかなり異例のことであり、王と私人の関係の変化を窺わせる。また碑文前半の内容は、Leahy (1985), 62 が述べるように、王を一個の人間のよう表現しているかのようでもある。新王国からサイス期にかけて、エジプトの王権が世俗化したとよく述べられるが、この史料もそうした観点から取り上げれば興味深い史料となろう。また、この碑文が特別な位置を占めていることから、パシェリエンアセトは、オソルコン2世政権の最重要人物であったことを窺わせる。恐らく、彼は王の側近く東部デルタにあったであろうし、その彼が、「上下エジプトのイスウト部隊の大將軍」という軍事称号を所持していることに注目される。オソルコン2世時代のデルタ行政に関する情報を幾分なりとも含んでいる可能性がある。従って、リビア朝前期のデルタ行政に関する史料を極端に欠いている現況にあって、この史料は、ささやかながらそうした間隙を埋めるものとして貴重な位置を占めるものとも言えるであろう⁽¹⁴⁾。

註

- (1) 例えば, Edwards (1982), 560, 'enigmatic'; Kitchen (1996), 94, 'cryptic'; Jansen-Winkeln (1988), 37, 'rätselhaft'などと表現されている。
- (2) Goyon (1987), 94にも全訳があるが, かなり意識されている。
- (3) Loret (1942), 101-102; Montet (1947), 72-73 and n.f; Vernus (1987), 109; Goyon (1987), 94.
- (4) この巡礼については, Spencer (1982), 160-163 [(邦訳) 185-189頁]に簡略な説明がある。
- (5) Loret (1942), 102-103; Kees (1944), 179; Montet (1947), 72; Vernus (1987), 109; Goyon (1987), 94, など。
- (6) 自説を取り下げることになった Loret (1942), 105-106では, カプスの後記の存在理由についての代わりとなる説明がなされず, Montet (1947), 73は, この碑文の存在理由を, テーベではなくタニスにおける王の埋葬と当時のタニスとテーベの関係(一般に緊張関係があったと理解されている)から説明しようとしているが, 納得のいくものではないし, パシェリエンアセトの哀歌に何故「カプスが作った」という一節が後記されているのかの説明もない。にもかかわらず, モンテはこの後記からカプスが王墓を準備したと述べているのである。その後, Kees (1944); Id. (1964)でもカプスの後記の存在理由については特に論じられなかったし, Vernus (1987), 109では, カプスがこの碑文の作成を監督したためとした。そして第3中間期の基礎研究を著したキッチンも「不思議な」と感じながらも「カプスが作った」と解釈し [Kitchen (1996), 94], またカプスが悲嘆者であると述べるのである [*ibid.*, 311, n.381]。また『ケンブリッジ古代史』におけるエドワーズも, 「謎めいた」としながら, この一節からカプスが墓を造ったと述べることになる [Edwards (1982), 560]。
- (7) Aston (1989), esp.145-148. 例えば, Beckerath (1995); Jansen-Winkeln (1995)が最近支持しているが, Kitchen (1996), xxiii-xxxivが反論を試みている。
- (8) 特に献呈句や出自を示す場合, ir.n.fという関係形が, この時期 ir.nn.fという形になるのは希なことではない cf. Jansen-Winkeln (1994), 93, n.2; Id. (1996), 122.
- (9) アメン大司祭ユエロトとタデニトエンバステトが夫婦であることは, Stela BM 1224から知られる cf. Jansen-Winkeln (1990)。
- (10) Cf. 小山 (1977), 98-99; 吉成 (1988), 94-95; Gardiner (1957), 293-295.
- (11) 発掘報告である Montet (1947)にはない。その後の諸研究にもあたっているが, 今のところそうした報告には接していない。
- (12) この碑文が証左にならないということであって, 他の根拠も挙げている Leahy

- (1985), 61-62の主張自体をこの一論で否定しようというものではない。
- (13) ただし、オソルコン2世の在位をどれほど見積もってよいのか、なおアストン編年には問題があると思われるが、ここでは触れない。
- (14) 本稿では、イスウト部隊に関する考察も予定していたが、紙幅の都合で果たせなかった。他日を期したい。

参考文献

- *略号は、*Lexikon der Ägyptologie* に拠る。
- Aston, D. A. (1989): "Takeloth II-A King of the 'Theban Twenty-third Dynasty'?" *JEA* 75,139-153.
- Barguet, P. (1961): "Un curieux objet votif du Musée du Louvre" *Mélanges Maspero*, I, (4), Le Caire, 7-10.
- Beckerath, J. von (1995): "Beiträge zur Geschichte der Libyerzeit" *GM* 144, 7-13 and *GM* 147, 9-13.
- Edwards, I. E. S. (1982): "Egypt: From the Twenty-second to the Twenty-fourth Dynasty" *Cambridge Ancient History*, 2nd ed., Vol. III, Part I, Ch.13, 534-581.
- Epigraphic Survey (1954): *Reliefs and Inscriptions at Karnak*, Vol. III: *The Bubastite Portal*, Chicago.
- Gardiner, A. H. (1957): *Egyptian Grammar*, 3rd ed. rev., Oxford.
- Goyon, G. (1987): *La découverte des trésors de Tanis*, Paris.
- Hodjash, S. and Berlev, O. (1982): *The Egyptian Reliefs and Stelae in the Pushkin Museum of Fine Arts, Moscow*, Leningrad.
- Jansen-Winkel, K. (1985): *Ägyptische Biographien der 22. und 23. Dynastie*, Wiesbaden.
- Jansen-Winkel, K. (1987): "Thronname und Begräbnis Takeloths I." *Varia Aegyptiaca*, 3, 253-258.
- Jansen-Winkel, K. (1988): "Weiteres zum Grab Osorkons II." *GM* 102, 31-39.
- Jansen-Winkel, K. (1990): "Die Stele London BM 1224" *SAK* 17, 215-219.
- Jansen-Winkel, K. (1994): *Text und Sprache in der 3. Zwischenzeit*, Wiesbaden.
- Jansen-Winkel, K. (1995): "Historische Probleme der 3. Zwischenzeit" *JEA* 81, 129-149.
- Jansen-Winkel, K. (1996): *Spätmittelägyptische Grammatik der Texte der 3. Zwischenzeit*, Wiesbaden.
- Kees, H. (1944): "Tanis, Ein kritischer Überblick zur Geschichte der Stadt"

- NAWG, 145-182.
- Kees, H. (1964) : *Die Hohenpriester des Amun von Karnak von Herihor bis zum Ende der Äthiopenzeit*, Leiden.
- Kitchen, K. A. (1996) : *The Third Intermediate Period in Egypt*, (1st ed. 1972, 2nd ed. with supplement 1986, Reprinted with a new preface 1996), Warminster.
- Kruchten, J. -M. (1989) : *Les annales des prêtres de Karnak (XXI-XXIII^{es} Dynasties) et autres textes contemporains relatifs à l'initiation des prêtres d'Amon*, Leuven.
- Leahy, A. (1985) : "The Libyan Period in Egypt, An Essay in Interpretation" *Libyan Studies* 16, 51-65.
- Legrain, G. (1897) : "Deux stèles trouvées à Karnak en février 1897" *ZÄS* 35, 12-19.
- Loret, V. (1942) : "La stèle votive du tombeau d'Osorkon II" *Kêmi* 9, 97-105.
- Malinine, M., Posener, G. et Vercoutter, J. (1968) : *Catalogue des stèles du Sérapéum de Memphis*, Tome I, Paris.
- Montet, P. (1947) : *Les constructions et le tombeau d'Osorkon II*, Paris.
- Spencer, A. J. (1982) : *Death in Ancient Egypt*, Harmondsworth [(邦訳) 酒井傳六／鈴木順子『死の考古学』, 法政大学出版社, (1984)].
- Vernus, P. (1975) : "Inscriptions de la Troisième Période Intermédiaire (I)" *BIFAO* 75, 1-66.
- Vernus, P. (1987) : "Choix de textes illustrant le temps des rois tanites et libyens" *Tanis, L'or des pharaons (Catalogue des expositions)*, Paris, 102-111.
- 小山雅人 (1977) : 『中古エジプト語文法』京都 (私家版).
- 吉成 薫 (1988) : 『ヒエログリフ入門』六興出版.